47

明治期の「養育院」の医師たち

稲松　孝思，松下　正明
東京都健康長寿医療センター

「養育院」は，明治5年10月に東京に作られた救貧施設であるが，明治期の養育院に在籍した医師達について記載した「養育院医療の百年」という内部資料がある．そこに医長7名，副医長10名，医員65名の名前が記載されている．これらの医師について，「東京都公文書館資料」，「東大医学部名簿」，「医学人名事典」（泉孝英），などに基づいて，明治期の養育院を医療面で支えた人脈について検討した．

明治6年2月に町医・村上正名を雇用して施設収容者の医療を開始している．また，明治7年1月，西洋医・佐々木東洋と門下の橋爪助信が医療を行い，同年11月に菊地武張，吾妻勝重が雇用されている．明治7年5月に東京府病院（府下病院・愛宕下病院）が芝愛宕下に開院されているが，養育院の病室は病院の付属とされ，明治8年2月に，そこの中堅医師栗田胤顕が医長として（明治8.2.22.～明治17.2.）養育院へ派遣されている．また，村上正名は，東京府病院からの派遣の形となり，東京府病院の医師の数人が養育院詰めとされた．すなわち，東京府病院と養育院は，医療と福祉を分担する体制が取られた．また，養育院利用者のうち重症者は東京府病院に入院．養育院の無縁死亡者の一部は病院で教育のため解剖に付された．また，養育院収容者の内，適任者は病院の介護人として雇用された．一方，明治6年に第一大学区医学校から解剖用遺体提供の申し出があった．明治8年東京医学校長・長与専斎による診療・教育の申し出があり，費用負担などの交渉後，明治9年に出張診療・臨床講義が実現した．また，明治11年東京大学医学部から診療の申し出があった．愛宕下の東京府病院は明治14年に廃院となったが，この間，英米系の御雇い医師，旧幕府系西洋医が主に診療している．東京府病院と東大医学部の間で，患者のやり取り，医師の派遣などで紆余曲折があったが，詳細については不明である．

明治17年，体制立て直しのため新たに医長制がとられ，東大医学部の教授，助教授クラスが兼任し，その門下生が1～3年派遣された．この間医長職にあったものは，橋本綱常（明治17.12.～明治23.3. 軍医総監，日本赤十字病院院長），弘田長（明治23.7.～明治26.12. 東京帝大小児科教授），三浦謹之助（明治26.12.～明治30.4. 東京帝大第一内科教授），入澤達吉（明治30.4.～明治35.12. 東京帝大内科助教授）である．この間の副医長は，岩井禎三（明治22.11.～明治23.6.30）光田健輔（明治31.7.：医員，明治41.5.～42.9.：副医長），三輪信太郎（明治34.10～明治35.12.）の3人であった．またこの間，在籍1–3年の医員が23名勤務しているがその出自は多様である．

この後，医長として，橋本節斎（明治35.12.～明治45.2. 元帝大第一内科助教授），伊丹繁（明治45.2.～大正4.6. 元帝大第一内科）が常勤となっている．この間の医員は35名にのぼるが，東京帝大からの派遣が多い．

この間特記すべき医師として，村上正名（町医師で，初めから10年間医員として医療を支えた），栗田胤顕（東京府病院の中堅医師から養育院に派遣された初代の医長である），入澤達吉（結核対策など業績多く，後年，始めての老人病学の教科書を書いている），光田健輔（長く若手医師，看護婦教育に精励した．また，ハンセン病の研究に尽くし，後に多摩全生病院院長に転出）がある．この間，養育院収容者のみならず，地域の医療にも参加している．以上，明治期の養育院医療の医師体制について述べた．